

価格と市場の経済学

入門経済学 5

上野裕也・小林好宏編



有斐閣選書

現代社会の基本的な仕組みや理念を示す価格理論は、抽象的で精緻な体系のゆえにきわめて難解です。本書は、初めて価格理論を学ぶ人のために、基礎理論を、具体的な制度や経済問題との関わりで生き生きと説明します。

上野裕也・小林好宏編

価格と市場の経済学

入門経済学 5



有斐閣
選書

価格と市場の経済学

〈有斐閣選書〉

昭和 51 年 12 月 10 日 初版第 1 刷印刷

昭和 51 年 12 月 20 日 初版第 1 刷発行



編 者	うえ 上 こ 小	の 野 ばやし 林	ひろ 裕 よし 好	や 也 ひろ 宏
発 行 者	え 江	ぐさ 草	ただ 忠	あつ 允
発 行 所	株式 会社	有	斐	閣

東京都千代田区神田神保町 2~17

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 株式会社精興社・製本 明泉堂製本

© 1976, 上野裕也・小林好宏.

Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取替いたします。

★定価はカバーに表示してあります

はしがき

価格と市場の理論は、ヒックスの『価値と資本』やサミュエルソンの『経済分析の基礎』に代表されるように、近代経済学の発展の歴史のなかでもっともよく耕され、エレガントな体系として早くから確立された理論である。だから、大学の経済学部や商学部などで近代経済学を学んだことのある人は、近代経済学の基礎理論として、ケインズ派のマクロ経済学とならんで、この種の価格理論あるいはミクロ経済学を、精緻な（難解な？）数学といっしょに一度は学習したはずである。この基礎理論の学習は、現在でもたいいていの大学で守られており、定型詩のように書かれた類似の教科書にしながら、必修の「経済原論」ないしは「価格理論」として、学生諸君を悩ませているようである。

近年の私の経験によれば、価格理論に対する学生の悩みの種は、この理論がむやみに抽象化され、精緻化されていて、現実性と有用性がどこにあるのかがよく分からないという点にあるらしい。現代の文科系の学生は、一般に論理的なものや抽象的なものを好まないし、しかもかれらは社会で一人前に働き生活したことがなく、現実の経済社会について知識も体験もほとんどないから、結局、抽象的な経済学と現実の経済との関連を問い、かつ考えることは、非常に苦手になるようである。

しかし、こういう学生諸君の悩みは、現実の息吹きを感じさせない価格理論の教科書や理論を現実との関連で教えない近代経済学者（教師）の側にも責任があるかもしれない。事実、伝統的な価格理論の現実性と有用性に対する疑問は、実社会で現実に取り組みながらこの理論を学び直した多くの官

庁・民間エコノミスト、経営者、実務家たちからしばしば投げかけられてきた。また、市場、競争、効率、完全競争、有効競争、過当競争、国際競争力、市場機構、管理価格等の基本概念をめぐって、現実課題としてなんらかの重要な政策判断や処方箋を必要とするたびに、近代経済学者と官界や産業界の人々との間で論争が行なわれてきた。あげくのはて、「価格理論は現実離れの空論である」とか、「価格理論は、もっとも知りたいことについて、何も答えていない」とか、「近代経済学者は、経済学のこととはよく知っているけれども、経済を知らない」という声さえ聞かれるようになった。

こういう疑問や批判の声は、誤解や感情論を含むにしても、近年、公害問題（環境問題）やインフレ問題（物価問題）が表面化し、これに対処すべき近代経済学の主流としての新古典派総合の切れ味が鈍くなるにつれて、しだいに大きくなってきた。とくに重要なのは、近代経済学者自身のなかから内部批判あるいは自己批判として、新古典派経済学の非現実性、不毛性、市場の失敗、経済学の危機等が叫ばれるようになったことである。

それでは、伝統的な価格理論を基礎とする新古典派経済学は、本当に現実的課題に答えられない非現実的な無用の長物として、棄て去られるべきものなのだろうか。編者の答は「否」である。

価格と市場の理論は、個人の自由と責任の原則の上に立った経済民主主義の経済思想に根ざしており、分権的市場機構こそ結局において資源の効率的な利用を達成させる市民的自由の合理的経済システムである。もちろん、この経済システムもけっして完全なものではなく、理論的にも実際的にもいくつかの限界や欠陥をもつ。これらの限界や欠陥は本書の各面で明らかにされるが、価格理論のもつ限界と欠陥を認めながらも、基本的に多くの分野で市場メカニズム（価格メカニズム）は有効に作用し

ており、問題の根本的解決を分権的市場機構に委ねるといふ経済民主主義の思想は今なお強く生きているというのが、編者の共通した立場である。

この共通した立場は、二人の編者の間で本書を企画するに当って最初に十分討議された第1章「市場機構と現代経済のしくみ」で明確に示されている。各分野の執筆において、執筆者の個性を生かしながらも、この共通の立場が貫かれているのが本書の特色の一つである。

従来の価格理論の教科書や講義が難解で若い人々になじみにくかったのには、三つの理由があるように思われる。

第一は、価格理論が全体として、規範の理論、記述の理論、事実の形成過程の理論がミックスされており、しかもそのなかに演繹論や経験則が混在していて、専門家でなければ容易に判別できないという点である。

第二は、現実との関連が稀薄だということであろう。

第三は、本質的な前進とは関係のない無用な精緻化があまりにも試みられたということであろう。第一の点については、伝統的な価格理論は、形成過程の理論をほとんどもっていない。たとえば、市場の分化・形成の理論、寡占形成の理論、組織形成の理論等をもっていない。近代経済学の価格理論が、非歴史的・非社会学的だと批判されるのはここである。伝統的な価格理論は、かなりの記述理論を含んでいるが、根本的には規範の体系である。個人や企業が合理的に行動し、市場のメカニズムがもし完全に働いたなら、もっとも望ましい資源配分が達成されるというのがそれであり、現実解釈や政策判断はこの規範体系からなされる。しばしば非現実的だと引合いに出される「完全競争の世

界（モデル）」は、この規範体系では一つの理想像とみなされているわけである。

第二の点は、現実の記述理論としてのフル・コスト理論や寡占企業の価格設定理論にみられるように、現代の価格理論ではかなり改善されているけれども、伝統的な価格理論の性格とかかわりのある欠点である。

たとえば、基本概念である市場自体についても、たいていの価格理論の教科書や講義では、あたかも自明のように話が進められる。しかし、現代社会の市場に関して、もっと現実に即して分類と記述を進め、市場のしくみの理論化を試みる必要がある。今日、大部分の市民は、伝統的な価格理論が想定し、抽象化しているような商品取引市場、証券取引市場、青果市場等に参入し、取引に直接参加することはない。かれらは、ほとんど消費者、最終需要者として間接的に商品取引市場等に参加しているにすぎない。大部分の消費財や中間財の取引について重要なのは、本源的な生産者（供給者）と最終的な消費者（需要者）の間に介在する卸売業者、小売業者、仲介業者である。したがって、両者の取引の媒介機能を果たすこれら商業者の行動と市場取引活動を説明しなくては、現代社会の市場メカニズムを語ることはできない。

また、不況期における寡占企業の価格行動による硬直価格の理論的裏付けとして、価格理論は、通常、スウィーजीの屈折需要曲線の理論を用いる。しかし、現実との関連でいえば、国民が近年いっそう強く意識しているのは、寡占企業による同調的値上げの頻発であろう。ところが、不思議なことに日本の価格理論の教科書や数多い経済学辞典はすべて、インフレ的需要の期間における寡占企業の同調的値上げの行動もまた屈折需要曲線の理論によって説明できることを示していない。

これらはほんの気がついた例であって、これ以上、例示するつもりはないが、いずれにしても、本書では、これまでの価格理論の教科書の欠点も改善するように、とくに前記の三点に留意した。その最大の新しい試みは、第Ⅰ部の「価格と市場の基礎理論」に対応させて第Ⅱ部「価格理論と現代」をとりあげ、ほぼ同一の分量を当てたことである。価格と市場の理論の現代的意義を問うにせよ、この理論の限界や欠陥を追求するにせよ、何よりも現実の光をあてる必要があると感じられたからである。この意味で、第Ⅰ章からただちに第Ⅱ部に移り、ふたたび第Ⅱ章以下にもどるのも本書の一つの読み方であろう。また叙述にあたって、ことさらに無用な精緻化を避けたことも付け加えておきたい。

しかしながら、いま刊行に当って、価格理論に現実の光をあてるというこのような試みが、はたして成功したかどうか編者には覚束ない気がするが、もし本書がこのような試みの手がかりになるならば、執筆者一同の喜びはこれにすぎるものはないであろう。編者としては、多くの読者の叱正によって、改善を期したいと思う。

最後に、本書ができ上がるまでに、編者は多くの執筆者にたびたび無理なお願いをしたが、快く協力していただいたことに深く感謝したい。また、本書の刊行については、有斐閣編集部伊東晋氏の熱意と多大な御苦勞があったことをとくに記しておきたい。

一九七六年二月

編者を代表して

上野 裕 也

目次

I 価格と市場の基礎理論

1

1 市場機構と現代経済のしくみ ◆価格理論の課題

2

1 はじめに..... 2

2 市場機構の役割..... 5

3 市場機構が作用するための条件..... 9

4 価格理論の課題..... 13

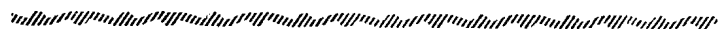
◇参考文献..... 22

2 需要と供給 ◆市場の均衡

1 需要・供給と価格..... 23

2 市場均衡..... 28

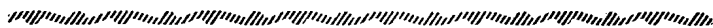
◇参考文献..... 33



3	消費者行動の理論	◆需要曲線の背後にあるもの	34
1	消費者行動理論と需要曲線		34
2	消費財の選択と効用理論		36
3	効用の比較と無差別曲線		43
	参考文獻		49
4	供給と費用	◆供給曲線の背後にあるもの(1)	50
1	企業の総費用曲線の構造		50
2	長期適合と短期適合		52
3	平均費用曲線と限界費用曲線		54
4	価格受容者としての企業		56
5	競争企業の短期均衡と長期均衡		59
	参考文獻		62
5	費用と生産	◆供給曲線の背後にあるもの(2)	63
1	企業の総費用曲線の分析		63
2	生産関数の概念・性質		66



3	收穫遞減と收穫遞増	68
4	規模の經濟性と技術進歩	70
	参考文獻	72
6	生産要素の價格形成	73
	◆市場機構と分配	
1	生産要素に対する需要	73
2	労働の供給と賃金	80
3	土地と地代	84
4	資本と利子	87
	参考文獻	91
7	價格機構と資源配分	92
	◆完全競争市場の基本性格	
1	諸市場の相互連関	92
2	價格機構	96
3	効率的な資源配分	100
	参考文獻	107
8	不完全競争	108
	◆独占・独占的競争・寡占の理論	



1	市場構造の分類	108
2	独占の理論	110
3	独占的競争の理論	113
4	寡占の理論	114
⌘	参考文献	126
9	国際間の価格理論	128
⌘	自由貿易の利益とその脆弱さ	
1	国際競争力とは何か	128
2	国際分業のあり方	131
3	自由貿易はなぜ守られないか	136
⌘	参考文献	142
10	市場機構の限界	143
⌘	市場の失敗	
1	市場機構の「限界」の意味	143
2	外部効果の概念と将来市場の欠如	148
3	公共財と公的介入のあり方	151
⌘	参考文献	155

II 価格理論と現代

157

11 混合経済

◆市場機構と公共部門

158

1 市場機構・計画化機構・混合経済……………158

2 競争的な価格決定……………162

3 協調的な価格決定……………164

4 行政介入による価格決定……………167

◇参考文献……………172

12 特殊な価格決定

◆医療料金と差別価格

174

1 財・サービスの質と参入規制——医療の場合……………174

2 差別価格……………178

◇参考文献……………182

13 公共料金

◆公益事業の規制

183

1 公益事業……………183

2 原価主義の意義……………185



3	私営公益企業の料金規制	188
4	二部料金	191
	参考文獻	194
14	価格理論と物価問題	195
	◆価格形成は物価水準とどう結びつくか	195
1	ミクロの価格理論、マクロの物価問題	195
2	大企業の価格設定	197
3	管理価格	201
4	部門間の価格差	206
5	生産性格差インフレ	212
6	通貨要因と物価	216
	参考文獻	217
15	市場情報と消費者選択	219
	◆現代の流通と情報構造	219
1	消費者はなにを基準に選択するか	219
2	技術進歩と情報不足	222
3	企業の情報は消費者に役立つか	224



4	消費者主権と価格問題	227
---	------------	-----

参考文獻	230
------	-----

16	生産要素市場の「ゆがみ」	231
	◆理論は現実をどこまで説明するか	

1	「ゆがみ」はあるか	231
---	-----------	-----

2	賃金決定における需給要因と制度要因	234
---	-------------------	-----

3	金融市場の不完全性	238
---	-----------	-----

4	経済理論と現実	242
---	---------	-----

参考文獻	243
------	-----

17	分配の公正と市場機構	244
	◆市場の失敗と再分配政策	

1	市場機構による所得分配の欠陥	244
---	----------------	-----

2	社会的公正と分配政策の目標	246
---	---------------	-----

3	所得再分配の方法	249
---	----------	-----

4	「自由」「効率」との関連	252
---	--------------	-----

参考文獻	255
------	-----

18	物価政策	256
	◆手段と評価	

索

引

1	物価政策の基本——総需要管理政策	256
2	公共料金の抑制	258
3	買占め、売惜しみの規制措置	262
4	直接的価格規制	264
5	ジョーボーニングのすすめ	266
6	聖牛退治の必要性	268
	参考文献	269



価格と市場の基礎理論